

本日のテキストはそれに先立つ5章16〜19節で「神の和解」、20〜21節で「使徒職」、6章1〜2節以下での「新しい時」について語っていることとの関連で読むべき個所です。なぜパウロはここで和解について語らなければならなかったのか。神との和解について語り、その和解を告げる使者としての使徒職について語り、その宣教によって明らかにされることは『新しい時』であるというのです。その新しい時は「神がもたらすものであり、その「新しい時」が到来していることを宣言することが福音宣教の中心だということなのです。

そして、ここでの和解というのは、人間同士の和解のことではなく、神との和解のことです。神と人間の和解が先にあつて、人間同士の和解があるというのですが、人間同士の和解がなければ、神との和解も永遠に訪れません。5章17節で『キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです』という言葉は、キリストによって「新しい人」として新生したことを表わしています。その根底には、肉によってキリストを知ろうとしないことが大切だとパウロは言います。「肉によって(カタ・サルカ)」とは、うわべによって知ることです。つまり、人間的な価値基準によってキリストを知ろうとしないことを言っているのです。そして、キリストに根拠を置くならば、その人は新しく創造されたということは、5章14節の『すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになりました』という十字架の贖いを根本に据えていることなのです。これはイエスの死による救済力がすべての人間に及ぶことを意味しています。もちろん、それはイエスのために生きる決意をした者にこそ実現することなのです。

「主の死はすべての人のためであつた」ということは、すべての人がこの恵みに預かっているのです。そして、この恵みはただキリストに結ばれたときのみ現実化するのです。「キリストに結ばれる」と訳されている言葉は原語では「エン・クリストー」で、直訳では「キリストにあつて」ですが、この意味は宗教改革者のカルヴァンによれば「キリストのみ国に、教会に、聖なる交わりの一員として受け入れられること」と説明する言葉です。「キリストにあつて」をパウロが用いるとき、その視点の先には必ず教会という信仰共同体のことが念頭にあります。それはキリストを通して信仰者の全体性が「キリストのからだ」(Ⅱコリ5)に統合されていくことを意味しています。これは信仰者個人が教会という全体に包括されることではなく、一人一人が教会を形成するかなめ石になるということです。そして、新しく造られることは、キリストによる新生を経て、御子キリストの鑄型に鑄造されることです。だから、17節の『古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた』ことで、新生したキリスト者は質的な変化を遂げるのです。キリストの福音の光の下で、立ちゆくことのできない人間的な思いや人間的な策略などが崩れ去り、新しい生き方が始まるのです。

そして、新生したキリスト者には和解の務めが託されるようになるのです。それは『キリストの使者の務め』(5章20節)であり、『キリストに代わって』(同)果たす務めなのです。それまでの自己中心性、自己への執着、自己の栄光化を追求することなどの古い生き方が過ぎ去り、キリストの福音を信じる者として、和解の働きを推し進めることを日常生活で実践していく者となるのです。「和解させる」(カタラセイン)は本来「変

¹ える」ことを意味する言葉で、それ自体に変化をもたらします。具体的には、ぎく

しゃくした夫婦の關係性を捨てて仲直りしたり、断絶していた親子が心を変化させて相互の信頼を取り戻すことです。敵意の關係から友情の關係へと変化することが和解なのです。人が存在するということは神との關係の中に生きることです。神が語りかけることに人は応答するなかで、神に従う信仰を形成していく物語が旧約聖書にはあふれています。これは關係性の中で信仰を考えていくということです。特にモーセの十戒は神と人の關係、隣人との關係を規定していて、人が生きることが「私が生きる」ということではなく、「私が神と共に生き、隣人と共に生きる」ことなのです。人はキリストがいなければ、神の位置に自分を置こうとするだけでなく、隣人（他者）までも支配しようとし、人間の尊厳性を奪い取ってしまうからです。そのために神は「戒め」を与えて、神との応答關係に入らせ、隣人との人格的な交わりに生きる者としたのです。しかもここでは自由意志を与えられた。それは神との關係性を人間の側も自由意志で応答しながら形成していく一方の主体と考えたからです。そうでなければ、人間は本当に意味で生きている存在とはいえないし、神との關係に心を閉ざし、他者と共に生きる喜びを失い、死んだ人間になってしまうと考えたのです。このようにキリスト教信仰は「關係の神学」といえるものなのです。たとえば新約聖書の放蕩息子の譬えでも、親子の關係回復をテーマにして神と人間との關係回復が主題になっています。イエスの復活も、神が命を奪われたイエスとの關係を再び回復させた出来事と言ったこともできます。また、復活したイエスが弟子たちに顕現したのも弟子たちとの關係の回復をめざしたものであり、その後昇天して神の右に座したということも、神との關係回復を象徴しています。このことをパウロは『神は、キリストを通して私たちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました』（5章18節）と言ったのです。

さらに「和解させる」という言葉には「交換」の意味があります。福音とはキリストと私たちの間に交換が生じたことなのです。キリストは私たちの罪と死を引き受け、私たちはキリストによる義と永遠の命をいただいたのです。この神と人間との關係の『恵みを無駄にしない』（6章1節）ために、『奉仕の務めが非難されないように』（3節）、『あらゆる場合に神に仕える者として』（4節）、様々な困難を神からの委託として受け止めて（4〜7節）誠実に生きていくのです。これらの業は『人に罪の機会を与えず：神に仕える者として』（3〜4節）和解の務めを実行する者の基本的な役割なのです。さらにパウロは福音を人々に担っていく者たちの二面性についても語っていきます。『わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、……』（8〜10節）という相反する言い方は、いかにもパウロらしい表現です。キリストによる和解の福音を宣べ伝える者は、福音を第一の価値としておくために、その他の艱難や非難を二の次のこととして受け止められるようになるのです。偽預言者による人間的な非難（人を欺いている、罰せられて当然だ、貧しい者たちを信用してはいけない、仕事をしていないなどのパウロへの非難の言葉）に対しても、誠実に対応していくのです。ですから、実際の生活で無一文となってもキリストに生かされていることが『すべてのものを所有している』（10節）かのような恵みに生かされていることを知るに至るのです。こうしてパウロは自分への非難までもが相対化されるのです。この意味で和解を告げる者は神の同労者になっていくのです。

神は御子イエスを裏切られることを承知の上でこの世へと派遣された。それにもかかわらず、キリストは復活を通して神と人、人と人の關係を和解へと導いていったのです。² そこにこそ十字架の贖いの業があるのです。